

HIRUGANOTE かきこみ広場



ご近所さんの近況を紹介するプチコーナー

Mamekana

花の駅
ひるがの高原
コキアパーク
ひるがの高原スキー場



ひるがの高原コキアパーク。本年の営業は10月27日をもって終了いたしました。園内はコキアやお花畑はもちろん、ジップラインアドベンチャーや山頂 BBQ、ディスクゴルフにドックラン。昨年から施設に加え、今年は小さいお子さん向けのストライダー（ランニングバイク）のコースも設置。年々進化し続ける「ひるがの高原コキアパーク」の来年に好ご期待下さい！

そして雪が降ったら、ひるがの高原スキー場として今シーズンもどうぞよろしくお願ひします。

牧歌の里
Bokka no Sato



牧歌の里。11月24日まで営業します。白山も雪化粧して、これからは紅葉も見ごろで、花の季節とは違う景色をお楽しみ下さい。日にちによってはパフォーマンスショーや、動物イベント、音楽祭もあります。そして大感謝祭企画！なんと抽選で福馬牛があたるスタンプラリーもあります。また12月に向けて、体験工房でオリジナルのクリスマスリースやキャンドル・カード作りはいかがですか。風が強いので防寒対策しっかりして、ぜひお越しください。12/7～3/31の土日祝日は冬季営業やります。

キッチン&バー
アウル **OWL**



OWLの庭にはどんぐりがいっぱい。オーナーから一言もらいました。「秋から年末年始にかけて、忘年会などで人が集まる時期です。二次会やちょっと飲み足りないかな、っていう時。週末の時間でもOWLはお待ちしていますよ。」フードメニューのラストオーダーは22時30分までですが、その後の時間も飲み物なら対応します（特に地元の方歓迎）という温かいお言葉でした。



ひるがの **LACHAISE**



ランチ営業引越しました。現在は、板橋「わに石」付近。看板を目印に、道を少し入った場所にお店を構えています。元・佐藤牧場がわかる人も多いかもしれせん。やぎのいる草原風の庭を眺めながらのんびりカフェタイム。冬期はひるがの高原スキー場で営業しています。※12月7日ポートメッセが古屋で開催される「クリエイターズマーケット」に出店。要予約。詳しくはインターネットで。

イベント情報やちょっと報告したいこと告知など、ひるがののことも何でもOK。情報をお寄せ下さい。発行に間に合う記事を掲載いたします。

「ひるがのーと」ご協力 ありがとうございます

お陰様で、たくさんの方から寄付や賛助を頂戴いたしました。心より御礼申し上げます。なお、郡上市からの補助金にて運営の半分を賄わせていただいておりますが、3年の補助期間終了となり、来年度からは補助金なしの運営となります。引き続きみなさまの篤いご支援をお願い申し上げます。

ひるがのーと 協力金

ありがとうございました

洞平由夫さん	山畑邦子さん
中邑米子さん	安田瑞彦さん
古橋 武さん	高原正典さん
古屋孝三さん	西村美奈子さん
奥山友加さん	原 美津子さん

■ ひるがのーとの会 ■

代表 / 清水 聡 0575-73-2101

■ 制 作 ■

ばっば・るいーず（中屋園実 森祐子）

■ 協力 写真・文 ■

瀬川和也 舟橋哲也 中田信也

ひるがのーとへのご意見・ご感想もお待ちしております。どうぞお気軽にご連絡下さい。

ひるがの簡易郵便局の観光案内所
（湿原植物園窓口） 中田まで

ひるがのーとの会

●協力金一口 / 500円より

ご協力いただける方はお手数ですが、
○フレッシュフーズひるがの 田中多恵さん
○観光協会・湿原植物園窓口 中田さん
どちらかへお願いいたします。

編集後記

秋という季節は知らない間にやってきて、気づくと終わっていますよね。それでも秋は待ち遠しい季節でもあって、楽しみもたくさんあります。

今回のひるがのーとは、秋の風物詩「祭り」を取り上げてみました。一度はやってみたいテーマでしたがタイミングが合わず、実現できずにいました。やっと思いが叶いました。

色々お話を聞いてみて、やっぱり行き着くところはひるがの「人」の良さでした。やろう会の話といい、青年団の話といい、ひるがのには若い人たちが地域のために何かやろうという元気な土壌がしっかり出来上がっているなと思ったのです。「若い人」はいつか年を重ね、ベテランになってい

きますが、その時には次の世代がそのまた次の世代へと、見えないバトンをきちんと渡しているようです。子どもの頃に楽しみだった行事を、次の子どもや若者たちが楽しめるように。「自分たちが楽しいからやっているだけじゃない。」という言葉が印象的です。誰が教えたわけでもないのに、ひるがのには「祭りの楽しみ方」が脈々と受け継がれ、いずれ主力になる次の若者を思いながら自分たちも思い切りリカバをやる。それは、短いけれど毎年人々が心待ちにしている秋のように、たくさんの楽しみを用意して、今年もそして来年も、その次も…と、めぐりめぐって行くのでしょう。

ひるがのーと..

ひるがのーとは、郡上協働まちづくり活動支援補助金の交付を受けて作成しています。

編集・作成
ひるがのーとの会

発行日/2013.10.30

もっと「知りたい」「知らせたい」… みんなで

ひるがのーと..

Vol.11



小さな種が芽を出し、計り知れない時間をかけて大木に成長する。その途中を、人はあまり知らないけれど、気づくとそこには立派な木が、空へと幹を伸ばしている。人が暮らし始めて、そこに集落ができ、年を重ねるごとにその暮らしは少しずつ伝統に密着していく。ずっと先の未来、振り返った人たちから見ると、今のひるがのとはどんな伝統をつくっているのでしょうか。今回の特集は「ひるがの祭礼」です。



考えたことある？ ひるがのの秋祭りが楽しい理由

今年、式年遷宮で沸く伊勢神宮。千何百年もの昔から、二十年に一度の大仕事を変わず守り受け継いでいるのだとか。それを考えると、ひるがのの神社はまだ産声を上げたばかり。ひるがのに人が住み始めてからほんの60年ほどなのですら無理もありません。お伊勢さんのように歴史を重ねてきた神社は、その始まりを目撃した人が生きているはずもない伝説のような存在ですが、ひるがのでは「ここに神社を」と望んだ人たちがまだお元気で、その望みをどんな風に叶えたかを、自分たちの記憶として持っています。その記憶を辿ってみました。
※今回は今年の氏子総代・和田繕長さんにお話をうかがい、福手豊丸さんの著書「回想ひるがの」を参考文献として構成しています。

人々の熱望で誕生したひるがのの神社

昔からここに土地があり、守ってきた人々がいたものの、まだ集落と言えるものはなかった開拓前のひるがの。ひるがのが地域としてスタートしたのは、やはり開拓団の入植が大きなきっかけでした。ところがひるがのは高地で寒冷地。しかも湿地で養分の少ない痩せた土地。やっとの思いで農地にしても、農作物は思うように収穫できず、入植した人々は辛い日々を重ねていました。そんな頃、何か心の支えとなるものが欲しいと、ひるがのに神社を望む声が強くなってきたのです。

色んな意味で厳しい時代。なんとか神社を建てる土地を確保したものの、今日、明日のこともままならない暮らしの人々には、新しくお社を建てる資金など、とても用意できたものではありません。そんな時、白川で御母衣ダムの建設が決定し、ダムの底に沈む集落の神社を譲ってもらえるという話が出ました。最初に話をもらった神社はとても大きく、いただくにも、その後維持をしていくにも相当のお金がかかるということで、お断りすることに。その後、ご縁があり、譲っていただけたのが当時の白川村尾郷の神社でした。ひるがのにほどよい大きさの神殿とその祭具を譲り受け、お祀りする神様はひるがのが独自で白鳥の長滝神社からご分神を受けました。

こうしてみんなの望みが、ひるがの白鳥神社の誕生によって叶ったのでした。



実は「ひるがの流」？ まだまだ進化中の秋祭り

昭和34年9月16日。神社完成の翌年には第一回目の例祭が行われました。神事のみが行われ、餅投げや映画上映が催されたといえます。それから時は流れ、昭和50年に獅子舞が登場すると、お祭は徐々に華やかに…。

真っ青な秋空に気持ちよさそうに泳ぐ色とりどりの吹流し。そして鮮やかな花飾り。でも、ちょっと待って。実はこれ、よそでは一緒に飾られることはないものなんです。吹流しは飛騨。花飾り【出し花】は郡上。それぞれ元は別のお祭り飾りらしいのです。神事後、子供たちと若連中がわっしょいと運んでくる樽酒。せーのの掛け声でぱかんとふたを割ってお神酒をちょうだいするアレ。アレもひるがのだけ。「樽酒を持ってきたら、みんなでたくさん酒が飲める」ってことで始めた、やはりひるがのオリジナル。獅子舞の時の口上も、ひるがのの獅子舞は白川のもので本来は口上は無いところに、郡上風の口上【東西呼ばり】を付け足してみたり…。「分水嶺で太平洋と日本海が繋がってるんだから、両方のいいところを吸収すればいいんじゃないか。」と今回、お話しして下さった和田さんも笑います。そういう考え方もあるかあ。すごいと思うものが、どれもなんとなくそれらしく溶け込んでいるところ。いいと思うものはどんどん取り入れていきます。

今年は、神主さんからの助言によって、初めて拝殿での獅子舞が試みられました。昔からの伝統を忠実に受け継いでいくというよりは、いまだ試行錯誤しながら、いつか伝統となるものを造っている最中ともいえるでしょうか。お祭りがにぎやかで、みんなが楽しくて、そして何よりひるがののらしければすべてオッケー。それがひるがの流。厳かなだけじゃない、楽しい理由がわかった気がします。



ひるがの白鳥神社の軌跡

- 昭和30年頃 御母衣ダムに水没する白川村尾郷地区から神殿と祭具一式を拝領。
- 昭和33年 白鳥町長滝白山神社(白山総社)から祭神をいただく。イザナギノミコト・イザナミノミコト・ククリヒメノミコトの御分神 ※読み方の難しい漢字のため、カタカナ表記しました。
- 昭和34年 祭礼日を9月16日と定め第一回祭礼を行う。
- 昭和45年 鮎走白山神社より旧拝殿を拝領。
- 昭和47年 折立・ドドメキ・釜ヶ洞地区に祀ってあった津島神社(病の神様)と秋葉神社(火の神様)を壱ヶ野白山神社境内へ移転。
- 平成22年 新聞地区 龍神様(水の神様)合祀

知ってる人には懐かしく、 知らない人には新しい「拝殿踊り」

今年は、祭の終わった夜7時。踊り好きがあつまって拝殿踊りをやりました。拝殿踊りは白鳥を中心とした付近の集落で昔から行われていました。拝殿の天井には切り灯籠を飾り、お盆に帰ってくるご先祖の霊と一緒に踊り、供養するというのがもともとの意味だそうです。参加した人が自分たちで即興で唄い、踊るというスタイル。娯楽の少ない昔には、この拝殿踊りが男女の出会いの場にもなったそうで(今で言えば合コン?)、唄が上手で声がいい人がモテたり、踊りの上手な人が人気があったりなんてこともあったのだとか。

ひるがのの拝殿踊りは、というところ…。7時すぎ。昔々の若い衆が一人二人と集まって、昔の唄をつかえつかえ思い出しながら、それでも踊りはしっかり体が覚えているようで、下駄の音とともに踊りが始まりました。しばらくすると、現役の若者ふたり登場。「ホントにやってるのが様子を見に来た」という彼らも最初は恐る恐るで、かなり困惑気味でしたが、こちらもまた体が自然に動き出すとすっかり踊りの輪に。唄も踊りも自分達の知らないものだけど、それが新鮮だったのでしょうか。



他に飲んでた仲間も電話で呼び出し、一人また一人と若者が増え、キレイどころも加わって、踊りの輪がにぎやかになりました。おじさんたちの途切れ途切れな唄に元気のいい合の手が入り、楽しそうな影がゆらゆらとゆれて。祭の後のもう一賑わい。昼のお祭が終わった時点では、「8時くらいまで様子を見て、誰も来なければ中止だな」なんて言っていたのに、最大では約20人ほどの踊りの輪ができていたという後日談も。来年に向けてまたひとつ、祭りの楽しみが増えたのかもかもしれません。

獅子舞とやろう会

ひるがのの獅子舞は、お祭の大きな楽しみのひとつ。祭当日には、ひるがの以外の方もカメラを抱えて撮影にくる姿も見られます。この獅子舞も神楽をいただいた尾上郷のものでした。神殿とともに神楽(獅子舞)の道具をいただき、その時、「できれば獅子舞を受け継いでいってほしい」との尾上の方の願いを託されたのでした。昭和50年ごろ、ひるがのの村おこしを目的に作られた「やろう会」が立ち上がり、移転でバラバラになった尾上の人たちをずいぶん苦労して探し訪ね、約一年かけて獅子舞を習い、秋祭りで舞うことができるようになりました。そのパトンは、次の世代に引き継がれ、現在、秋祭りの代名詞ともいえる存在に。毎年、ひるがの獅子舞保存会のメンバーに加え、その年の小学4年生の男の子が花取りとして舞うのが恒例となっています。

当時の「やろう会」メンバーで、獅子舞の習得の中心として活躍されたのは、今回お話をうかがった和田さん。「何かひるがののためにやろう」と若い世代がはじめた「やろう会」では、みんなで木を植えたり、子供たちのために行事を催したり。40歳までなら誰でも参加できたこの会のおかげで、「ひるがのがひとつになった」という人もいます。この「やろう会」ができたことによって、自分たちの地域をよくするため、という同じ目的で活動する場が生まれ、連帯感ができたのでしょう。現在でもお祭や獅子舞は地域をまとめるのに大きな役割を果たしていると思います。



<参考文献の紹介>

今回、ひるがのの神社や獅子舞の成り立ちについて、参考にさせていただいたのは福手豊丸さんの著書「回想 ひるがの」です。ひるがのについて、伝説から現代にいたるまでの歴史を、福手さん独自の調査や記憶でつづられています。ぜひ一度読んでみてください。新しい発見がたくさんありますよ。

前夜祭

ひるがのお祭といえば、祭当日はもちろんのこと、前夜祭を楽しみにしている人も少なくないのでは？今年も、お約束の飛び入りを含めて 組名の芸達者がステージの上に立ち、祭りの前夜を盛り上げてくれました。

今年は、例年よりさらに出演者の層が広がったような気がします。生まれたばかりの赤ちゃんから、100歳間近のお年寄りまで。ひるがの人たちはもちろん、北小に通うひるがの地区以外の子供たちや、さらには学校もひるがとは関係ない高鷲の中学生もエントリー。そのおかげか、台風が近く怪しい天候にも関わらず、観客もいつになく幅広い客層の方々がたくさん集まったのでした。

誰でも参加できるひるがの前夜祭ならではの魅力ですね。



- トトロの会のお母さんたちも毎年工夫して、ちびちゃんたちをステージに上げてくれます。今年は、「〇〇さんのお宅の誰々さんのお子さんで何々くんです。そのお母さんの何々さんです。」という紹介文が印象的でした。ご近所の方々へのとてもわかりやすいお披露目になって、「何々さんどこにお孫さんが生まれたんだね。」なんて微笑ましい会話が生まれていましたよ。
- 中田さんの声かけで集まってくださったごぶしの会のみなさん。100まで元気で過ごしましょうと、会場を巻き込んでの体操を披露。くすっと笑えるポイントも用意して、和やかな笑いを誘っていました。
- 少ない練習時間で、難しい踊りを身につける舞踊に出演の皆さん。今年も花を添えてくれました。
- 女の子たちのダンスも年々レベルが上がっているみたい。出演者数も増えてますね。 女子がダンスなら、男子(?)はお笑いのかな。今年は何をやってくれるのかな？とみんなが出演を楽しみにしていたりするご当地スターも育ってきたりして。
- 今年の青年団は、誰でも知っている桃太郎をモチーフに、それぞれのキャラを生かしたオリジナルの劇に挑戦。なかなかの力作。よくここまで出来た、と本人たちも満足気に振り返ります。青年団の楽しさが観ている人たちにもすぐ伝わりました。※詳しくは「We Love ひるがの」のコーナーで。

We love ひるがの

大好きなひるがののこ教えて下さい ⑫

祭り好き？ひるがの好き！

今年の「ひるがの桃太郎」。ひるがの的に放送コードすれすれな場面もありませんでしたが、内輪ウケと会場ウケの絶妙なバランスの芝居。個人的には軽く感動すらおぼえました。それで気になったのが「脚本、誰がかいたんだろ？」ってこと。出演者の瀬川さんに尋ねると「脚本なんて、ほとんどなかったようなもんだよ。」という答え。大筋を考えたのは蔵田健二さんと井上透くんだと聞き、「へえ〜」と思いました。前夜祭のリハーサルから写真を撮りにいらした私は、このふたりがステージ脇でこそこそと何やら話し合っているところを目撃していました。その様子はいかにも「おぬしも悪よのお」「ふえふえふえ」といった感じ。「あの二人かあ。」多少の懸念はありましたが、瀬川さんをお願いして、彼らに取材を申し込みました。そこで出てきた話とは…。

10月1日火曜日、午後7時すぎ。OWにて。挨拶の後、さっそく「桃太郎が面白かったから、せひ話が聞きたくて」という二人は「ほんとですか？あざっす」と、心底うれしそうに笑いました。ホッとしたり、とも取れる表情。桃太郎に対する周りの反応が気になっていたのではありませんか？今回の青年団による桃太郎。まったくのオリジナル創作劇でした。今までも前夜祭ではさまざまな劇が演じられてきました。でも今回のように脚本もゼロから自分たちで作ったものは前代未聞です。セリフはもちろん、所作や道具類まで全部自分たちで考えて作るというのは、口で言うほど易しいことではなかったそうです。

しかも、劇をやろうと決まったのは8月の半ば。ほんとに動き出したのは8月ももう終わりの頃でした。練習にもなかなかメンバーが集まらず「ギリギリまでできなくてめっちゃ焦った。」と顔を見合わせて話す二人。「全員で最初から最後まで練習できたのなんて、前日のリハーサルくらいだよなあ」ってことで本番当日も上演時間すらわからず、いったいどうなるのか誰も予測のつかないまま幕が開き…。ところが、青年団はみんな底力を見せました。それぞれが自分のキャラを生かして、奇跡的に大成功。アドリブも飛び交い、役者の出来は、全員当日が一番よかったのです。最初はイマイチやる気の感じられなかった桃太郎役の青年団長が、最後の挨拶では思わず言葉を詰まらせ、泣いてしまっ場面も。

「そもそも、どうして桃太郎をやろうと思ったの？」

「子供に見せてやれるものをやりたい。桃太郎とかみんなの知っているやつって言うたら、そのまま桃太郎になったんだけど。」

「とは言え、いろいろ暴走し始めて、仲間から「これはまずいやろ」と突っ込まれ、修正を加えた結果があれだぞうで(笑)。脚本という台本なんてほとんどなかったらしく、健二くんが作ってきた話は途中でなくなっていく、みんなでああだこうだ言いながら、なんとか形にしたんだという。本番前、何日間かは精神的にもかなり追い込まれたとか。」

「みんな仕事してるし、集まるのも大変でしょ？」

「うーん…。何にもやらなかったらラフだよな。でも何かやって次に繋げたい。」

「自分たちが楽しいからやってるだけじゃなくて、見てる若いヤツらが、楽しそうだから自分たちもやりたいって思ってる。自分たちはほんとに青年団じゃないけど(既婚者は卒業する決まり)今の青年団はすごくがんばってるし、あいつらに目立ってほしいなって思う。」

「そうして祭りをきっかけに地元で仲間が増えて、なんかあった時、自然に助け合えるつながりができたらいい、と消防団にも席を置く二人はしみじみと語るのです。

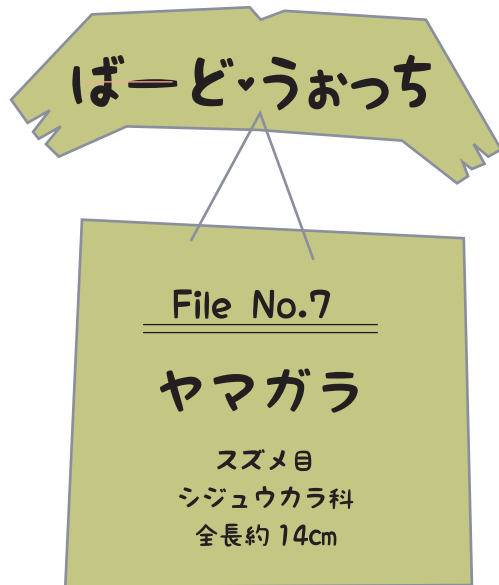
健二くんも透くんも、どうやら悪代官と越後屋ではないみたいです。

ひるがの育ちの二人。共通しているのは大人になってよその土地で暮らした経験があること。その経験があるから、ひるがのの良さが余計にわかると思います。周りの仲間のこと、「あいつらひるがの大好きやもんや」と言いますが、いえいえ、君らも負けてませんよ。世の中、地元を見直す流れはありますが、ひるがのの若者は放っておいても自分たちで考えてひるがのを盛り上げようとして動いているよです。」



蔵田 健二さん(31)
 民宿・大蔵屋の次男。透さんと共に前夜祭を仕切り、青年団を引っ張る。普段は高鷲の子供たちの剣道の指導もしている。

井上 透さん(33)
 前夜祭を長年動かし続けてきた井上進さんの長男。今年から前夜祭の実行委員を引き継ぎ、修行中(?)。蔵田健二さんと共に前夜祭当日は司会進行から捨て身の芸も披露。



人なつこくて クレバーな野鳥「ヤマガラ」

ひるがの高原では年中いつでも観察することができるポピュラーでかわいい小鳥。胸から腹が赤味のある茶色で見つけるのも簡単です。落葉広葉樹林を生息域とし、前回紹介した「ゴジュウカラ」など他のカラ類と混群を形成して移動し、鼻にかかったしゃがれた声でギーギー・ギーギーと鳴くことが多いです。

好奇心旺盛で人にもすぐに慣れて、肩に乗ってくることもあります。今では、鳥獣保護法により捕獲が禁止されてので見ることはできませんが、学習能力が高く、かつては飼育が盛んに行われ「おみくじ引き」や「かるたとり」の芸を教えることができたそうです。

ひまわりの種が大好きなので、餌が不足する冬はペットボトルを工夫した餌箱をベランダに設置すれば集まってくるのでぜひ試してみてください。

【文 / 写真：舟橋哲也】



知ればもっと好きになる。

ひるがの高原の貴重な動植物 第一回 ～南限のエゾイトトンボ～

私がトンボに興味を持ち始めたのは、友人がひるがの高原ではこれまで文献に記録のなかったハッチョウトンボを平成 18 年に見つけてからです。それから現在までに、友人と私とでひるがの高原では約 30 種のトンボを観察しています。その中に青い色をしたイトトンボがいることになりましたが、それがエゾイトトンボだという種類だとはっきり分かったのは、ひるがの湿原植物園で撮った写真を整理していたときでした。写真 1 がそれです。背中(腹部の第二節)にはっきりとしたスベード型の斑紋があるのが分かります。これは、エゾイトトンボのオスにしかない特徴です。

エゾイトトンボ(蝦夷糸蜻蛉)は、その名の通り、北海道全域が主な生息地域で、本州では中部地方以北の主に日本海側に分布しています。昨年発売されたばかりの図鑑(※1)を見ると、岐阜県は生息域の南限に位置していることが分かります。また、岐阜県のレッドリスト(※2)に、準絶滅危惧として記載されています。岐阜県のホームページ(※3)で確認すると、ひるがの高原は県内でもエゾイトトンボの生息域の南限に位置していることが分かります。つまり、ひるがの高原は日本全国のエゾイトトンボの生息域の南限であるかもしれないということです。

そのような珍しいトンボならば、観察するのはさぞ難しいのではと思うかもしれませんが、6月にひるがの湿原植物園のミズバショウ池や水路の周辺では比較的簡単に見ることができます。しかし、どういうわけか、ひるがの高原の他の場所ではあまり見たことがなく、不思議に思っていました。図鑑(※1)では、エゾイトトンボの生息場所は「平地～山地の周囲に樹林のある抽水植物や浮葉植物の繁茂する透明度の高い池沼」とあります。それは、ひるがの高原では、コウホネ、ヒツジグサ(準絶滅危惧)、ヒルムシロ(絶滅危惧Ⅰ類)などが生えている場所です。これらの植物に共通するのは、近い将来、ひるがの湿原植物園の池や水路が、ひるがの高原の最後の生育場所となる可能性が高いということです。つまり、そこを生息場所とするエゾイトトンボにも同じことが言えます。

現在の尾瀬ヶ原のように、おそらくかつてのひるがの高原には、ここでは今ではほとんど見ることのない浅い池や沼や緩やかな流れが今よりずっと広がった湿原の中に転々と存在していたはずで、そういう場所に先にあげたような水生植物や、そこを住処とするエゾイトトンボなどのトンボが飛び交っていたはずです。園内の池や水路は、人間の憩いの場として整備する際に人工的に作ったものではありますが、偶然にも今では本来の意図とは関係なく貴重な水生植物やそこに生息する動物たちを保護する重要な役割を担うことになっています。

エゾイトトンボがひるがの中どこでも見られるようになることは今後も難しいとは思いますが、もし、そうなれば、ひるがの高原はエゾイトトンボ生息の南限としても広く認識されるようになるかもしれません。

(文章・写真 瀬川和也)

参考：

※1 尾園暁・川島逸郎・二橋亮, 2012. 日本のトンボ. 文一総合出版.

※2 岐阜県レッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物の一覧)

絶滅危惧Ⅰ類: 県内において、絶滅の危機に瀕している種

絶滅危惧Ⅱ類: 県内において、絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧: 県内において存続基盤が脆弱な種

詳しくは、岐阜県のホームページ <http://www.pref.gifu.lg.jp/kankyo/shizen/>

※3 岐阜県のレッドリストのエゾイトトンボのページ

<http://www.pref.gifu.lg.jp/kankyo/shizen/red-data-dobutsu/konchu-rui/ezoitotonbo.html>



エゾイトトンボ(雄)と背中にあるスベード型の模様
2005/6/7 ひるがの湿原植物園：撮影
エゾイトトンボは、止まる際には羽を背中側で閉じる。これは、イトトンボやカワトンボの仲間(イトトンボ亜目)の特徴である。一方、赤とんぼ・シオカラトンボ・ヤンマの仲間(トンボ亜目)は、羽を横に下ろして止まる。



エゾイトトンボの交尾
2010/6/30 ひるがの湿原植物園：撮影
ミズバショウの葉の上で交尾中の雄と雌。雌は緑色をしている。



エゾイトトンボの産卵
2010/6/10 ひるがの湿原植物園：撮影
ヒルムシロの葉の上で止まって産卵中の雌と雄。産卵は雄と雌が連結して行うことが多いが雌単独の場合もある。